

朝鮮大邱高等普通學校	教諭	○多木孝
長野縣立諏訪中學	教諭	○山崎秋成
栃木縣栃木高女	教諭	○有安助二
岡山縣私立與讓館中學	教師	○岡野賢三
		鳥山新四郎

関連事項

① 三浦光風辞任と牙彫部廃止

彫刻科は明治四十年六月以降塑造、木彫、牙彫の三部制をとり、牙彫部は教授石川光明と雇三浦光風（本名柳三郎）が指導にあたっていた。大正二年に光明が死去した後は光風が後任となり、同七年十一月に助教教授に任命されたが、翌八年一月には辞職（同年歿）し、後任の採用は無く、牙彫部は事実上廃止（制度上は同十二年）となった。その間、大正五年に卒業生一人、同七年に中退者三人、同八年に卒業生二人、中退者三名があったのみである。なお、牙彫部最後の卒業生であった故後藤藤清一氏（明治二十六年〜昭和五十九年）の談話によれば、氏は牙彫修業の後に大正四年に東京美術学校に入学したが、二年後には牙彫教育はとり止めとなり、木彫部に編入されて高村光雲の指導を受けたという。

② 日本創作版画協会

大正八年一月十五日から二十日まで三越呉服店で日本創作版画協会第一回展が開催された。同会は前年六月に山本鼎、寺崎武男、織田一磨、戸張孤雁、竹腰健造らが結成した団体で、その趣旨は、西

洋の美術展覧会には必ずエッチングや木版画の作品が出るのに対して日本では非常に優れた版画の伝統があるにも拘らず、文展は版画を排斥し、東京美術学校も製版科がありながら写真製版やコロタイプ等工業的製版を専らとしており、版画の奨励策は全く講じられていないので、自画、自刻、自摺の趣味ある創作版画を発表して世人の注意を喚起しようということにあった。第一回展の出品者は上記五人の外に石井鶴三、小泉癸巳男、萬鉄五郎、永瀬義郎、広島晃甫、逸見亨、前川千帆、喜多武四郎、バーナード・リーチ、M・マニング、恩地孝四郎、藤森静雄、故田中恭吉、故香山藤祿らで、木版画が過半数を占めた。展覧会が大きな反響を呼び、成功をおさめたため、同会は以後毎年展覧会を開くこととし、官設展に版画部門を設けること、東京美術学校に版画科を設置すること、創作版画の普及と版画家出現を促すこと、教習所を設立することなどを目標（『日本創作版画協会第七回展覧会目録』昭和二年）に活動を始めた。その結果、大正十五年には版画も帝展に出品できるようになった。同会は昭和六年に日本版画協会へと発展するが、その近代版画史上の功績は甚大であったと言える。

ところで、創作版画運動と東京美術学校の関係を考えてみると、上記の第一回展では卒業生の山本鼎（三十九年）、寺崎武男（四十年）、石井鶴三（四十三年）、萬鉄五郎（四十五年）、広島晃甫（同）、藤森静雄（大正五年）や中退生の恩地孝四郎、田中恭吉（大正四年歿）らが活躍しているが、そのうちの最も先輩の山本鼎は、そもそも創作版画運動の発端を作った一人である。彼はすでに卒業の翌年五月には同期の森田恒友および眼病で中退した石井柏亭らと『方寸』を発行し、これ